

# 琉球大学学術リポジトリ

## 乳幼児の道德性の発達と教育に関する歴史的研究 ーコメニウスの場合ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1096">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1096</a>

# 乳幼児の道徳性の発達と教育に関する歴史的研究

## — コメニウスの場合 —

藤原 幸男

Historical Study on Development and Education of Morality of Early Childhood  
— in regard to J.A. Comenius —

Yukio FUJIWARA \*

(Received May 31, 1989)

### 1 「母親学校」の構想と『母親学校の指針』

コメニウスは、『大教授学』(1638)の第27章「年令と発育との段階にしたがって構築された・学校の4階程について」において、徒弟の修業期間を模倣して24歳までの成長期を4つの段階に区切り、各段階には6カ年の学校を割り当てている。つまり、幼年期には「母親の膝」または「母親学校」、少年期には「母国語学校」、若年期には「ラテン語学校」、青年期には「大学」をおくのである。この構想は晩年の『汎教育』(1657以降執筆)では生涯にまで及ぶのだが、0歳からの乳幼児教育を入念に構想し体系づけたのは、コメニウスが最初であろう。その意味では、コメニウスにおける「母親学校」の構想は乳幼児教育の源流だともいえよう。<sup>1)</sup>

0から6歳までの幼年期では「母親学校」で子どもは教育を受けることになる。ここでいう「母親学校」とはふつうの意味での制度化された「学校」ではなく、母親の膝のもとでの「家庭」を指している。「母親学校」では、子どもは母親またはそれに代わる者のもとで系統的に教育を受けるのである。

コメニウスによれば、「母親学校」はそれ以後の学校とは全くちがったものを教えるのではなく、あらゆるもの・同じものをちがったやりかたで教

えることになる。しかも、あらゆるもの・同じものを全般的におおまかに教えることになる。また外部感覚の訓練に重点をおき、外部感覚の対象と正しく交わり、これを識別する習慣をつけることをねらいとする。外部感覚の訓練は、母国語学校における内部感覚の訓練の基礎になる。こうして、後続の学校の基礎を培っておくことにその役割があるとされる。この点は重要である。このところをしっかりと押さえておかないと、「学校」という名称や(「自然学」「光学」といった)教授科目の名称から高度な内容の伝達というイメージが浮かび、何と詰め込みで知育に偏重した教育なのだ、という偏見に満ちた批判が単純になされることになり、コメニウスの真意を理解できなくなる。実際、コメニウスが母親学校で注ぎ込まなければならぬ・子どもにわかる事物の目録としてあげている20項目、徳についての知識としての12項目、敬神についての知識をみると、その大半において〇〇の土台、基本、初歩、きっかけという言葉で内容が示されているのであって、高度な内容では全くない。

コメニウスは『大教授学』では「母親学校」の目標・課題を列挙するにとどめて、これ以上の説明は不可能だとする(第28章「母親学校の原型」)。毎学年・毎月・毎日の厳密な計画表は想定されて

\*Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.

いない。「たとえば毎学期・毎月・毎日、なにをどこまで教えられるか、その計画表をつくってお目にかけることは(母国語学校やラテン語学校ではこうした計画表の作成をお勧めします)、このあとの学校と同じ工合にはまいらないのです。」とする。それは、一つには、教育者である親の特質による。親の場合には家庭の用事があり、こまかく決めても学校のように精密に守ることはできないからである。二つには、教育の対象となる乳幼児の特質による。乳幼児の知能の発達や学習への熱意の現れ方には個人差があり、実にまちまちだから、こまかく計画表をたてても、なかなかうまくいかないというのである。こうして、この乳幼児期の最初の教育は、全体として、両親の思慮にまかせるほか仕方がないとする。ここにすでに、親への教育的配慮や、乳幼児への発達のまなざしを見ることができる。このような考えからコメニウスは、少年期以降の制度化された学校のように、厳密な教育計画を立てて親・子どもをしぼることはしない。

しかし、親への指示をまったく止めたわけではない。乳幼児教育をうまく行うためには、乳幼児教育の目標や子どもについての大本の考え方をしっかり理解する必要がある。また、実際場面での子どもへの接し方、振る舞い方をイメージ豊かに描く必要がある。そこでコメニウスは『大教授学』での記述とは別に小冊子(『母親学校の指針』)を書くことを予告し、「この中に、幼児教育の目標の全部と、一つ一つの教育のきっかけにするにはどんな機会をつかまえたらいいか、またどんなやり方・どんな言葉・どんな身振りでひとつひとつのみ込ませたらよいか、といったことが事細かにしるされるであります」と述べている。

『大教授学』で予告された『母親学校の指針』は1632年にチェッコ語版が出版された。その後、1633年にドイツ語版、1636年にポーランド語版、1642年にスウェーデン語版、1653年にハンガリー語版、1657年にラテン語版が出版され、世界各国に広まった。<sup>9)</sup> コメニウスはチェッコ語版の出版以来少しずつ手を加えており、少なくない加除がみられる。以下では最初に出版されたチェッコ語版にもとづき、乳幼児の道徳性の発達と教育に関するコメニウスの見解をまとめることにする。

## 2 乳幼児教育の目標

なぜ乳幼児の教育が重要なのかについて、コメニウスは『母親学校の指針』第1章で次のように述べる。幼子が生まれた目的は、将来において私達の後に続く世代の住民、至高と永遠不変のすべての相続人となるため、これほど名誉ある者はいない。また現在の姿に目を止めても、無垢でこの上もなく清楚な取得物である。幼子は神にとって極めて高価な宝玉であり、その両親にとっても同じ宝玉となるはずである。親にとって、金、銀、高価な宝石よりも高価なものになるはずである。したがってこの上もない配慮を受けるに値する。<sup>10)</sup> コメニウスはこうした子宝思想に立脚して乳幼児の教育を構想する。

コメニウスは『母親学校の指針』第2章で「神が親に幼子を託した目的と、その幼子を指導すべき目標」を述べているが、コメニウスの教育目標は、まず、神学的見解に基礎づけられている。人間は魂・精神と肉体をもつ。飲食、歩行、会話、着服を覚えさせることは大切だが、それだけでは不十分である。それは人間の旅宿にすぎない肉体にかかわっているだけであって、家の主である理性的魂に目を向けなければならない。魂・精神は人間の主要部分だから、まず魂・精神へと方向づけられなければならない、と述べる。良く方向づけられた精神とは、正しく天の知恵から光を得ることだという。ここで天の知恵とは、一つには、神と、神の業を知ることである。来世的見地からは現世も来世への過程であり、神を知ること＝信仰と敬虔な心の形成で充分なのだといえる。だが、神が現世に人間を生かしていることからすれば、現世においては徳性と学芸も必要不可欠になる。こうしてコメニウスは、本当の天の知恵には、二つには、自分と、自分の内外にわたる行為のすべてを、賢明かつ理性的に、現世と来世に向けて調整する術を知ることがあるとする。ここにおいてコメニウスは、来世的見地＝神学的見解だけでなく、現世的見地からも教育をとらえ直すことになる。そこから、現世がよければ来世もよい、と反転させて事態をとらえ、教育改革の道を提示していくことになる。

コメニウスによれば、「神様がこの世でも寿命を長く授け、役職や義務を課し、さまざまな事情

に遭遇させている者がいるのですから、親にとっては、自分の幼子を、信仰や敬虔な心という面ばかりか、称讃に価する習慣と作法や、あらゆる類の学芸という面でも育み、また、育ませることが必要となります。そうすれば、その幼子は、成人して、ひとりで人々の間で理性的に振る舞えるようになり、神が、教会あるいは政治で従事させたいと思っている者は、それに従事させられるようになり、また、このことを通して、この世の人生をキッチンと、理性的に、有益に過ごし、それによって、いっそう楽しみを抱いて永遠の世に足を踏み入れることになりましょう。』<sup>6)</sup> という。

こうして、現世にあっては、信仰や敬虔な心、称讃に価する習慣と作法、あらゆる類の学芸が育まれなくてはならないことになる。コメニウスにあっては、乳幼児にあって絶対に指導されなくてはならない目標は、他の年齢段階と全く同じく、信仰と敬虔な心、作法と品性、言語とあらゆる類の実践的知識に精通すること、の三つなのであり、「親たちにとっては、その子を抱きしめるというこの乳幼児の学校のうちからすぐ、幼児の中にこの三つすべての強固な基礎を据えることが、義務とな」<sup>6)</sup>る。

### 3 道徳性の内容とその構造

コメニウスは『母親学校の指針』の第4章「幼い者を、その誕生からすぐ、ほんの少しずつ育み、その子の6歳までの時期に習熟させるべきことは、何についてか」で、道徳性＝作法と品性についてその内容をあげている。

それによれば、①中庸(節制)、②身だしなみ、③気づかい、④従順、⑤正直、⑥正義、⑦勤労精神、⑧沈黙、⑨我慢、⑩奉仕の心、⑪礼儀正しさ、⑫ていねいさ、の12項目である。ただし、チェッコ版の翌年に発刊された『母親学校の指針』ドイツ語版(1633)では⑥と⑦のあいだに「愛と善行」を挿入してある。また『大教授学』(1638)では、⑥と⑦のあいだに「友愛」を挿入してあり、その代わりに⑪が削除されている。このことは、コメニウスにあって、道徳性の内容に構想上の若干の揺れがあったことを示すもので、興味深い。ここでは、これらのちがいの検討はさておいて、チェッコ語版<邦訳>にもとづいて以下で論述していく。

それぞれの項目について、コメニウスは『母親学校の指針』の第9章「幼い者の作法と品性は、どのように育むべきか」で詳細に述べている。そして上記の作法・品性を乳幼児に合理的に、キッチンと、徐々に育むための手だてを提案している。<sup>6)</sup>

まず、①中庸(節制)である。ほどよく飲み、食べ、眠ることである。自然のさそう空腹、渇き、眠気に気づいたときに、そのときだけ飲ませ、食べさせ、眠らせることである。自然が欲している方法と範囲内で与えるだけで充分なのであって、それらに気づく前から、かれらの意志や好み以上に詰め込んだり、流し込んだり、強制してはならないのである。この自然の欲求にしたがったほどよい生活行動こそが「健康と生命の基礎」なのであって、これこそが「他のすべての品性の母」なのである。

②身だしなみと身づくろいは、その初歩的なことは、1歳前にすぐできる。それはできるだけ最高に小ざっぱりとさせることによってできる。さらに2～3歳までに、きちんと食べ、飲むことを学ばせることをコメニウスは要求している。飽食(必要以上に食べること)、舌鼓、舌嘗めづり、などをしないできちんと食べ、よごしたり、つばを飛ばしたり、ふさわしくないガブ飲みをしないで飲むことを教える必要がある、というのである。

③気づかいは、年長者や他人に対する気づかいを指す。気づかいに馴れるようにするには、年長者の注意を子どもが感じ取れるようにすること、そうした心性を準備することが必要になる。そのために年長者からの警告・禁止・殴打を必要視する。親だけではなく、他人にまで年長者の範囲を広げていく。親の目の届く範囲ばかりでなく、他人・年長者に自分のいる所ならどこでも自分が注目されていることに馴れるように、そして他人に対する気恥かしさと敬意もその子の心に基礎づけられるように、親権を譲渡することも良いことだとしている。親権を他人にも譲渡して、大人同士で子どもに注意しあうことが重視されていることに注目したい。

④従順は、親・他人・年長者への敬意とも関連して、実際に素直に従うことである。親が「それをそのままにしておきなさい。ここに来なさい。座りなさい。さあ、ここに出しなさい。ナイフを

よこしなさい。……」と申し渡すときはいつでも、指示された通りに行うように子どもをしむけるべきだとする。こうした行為を通して、自分の意志を曲げ、他人の意志に気をつけることを覚えれば、それはあとになって偉大な品性の基礎となるというのである。

⑤正直は、事実を話すということであり、大仰なことではない。欺瞞・嘘をつかないということである。嘘つきは奴隷の美德だとされ、忌み嫌われるべきことだとする。したがって幼児にあっても、何か悪いことをしてかしても、言い逃れしないで、謙虚にそれを承認するようにしむけるべきだとするのである。

⑥正義ということによって言われているのは、他人の物に対する欲望の節制である。他人のものを取ったり、自分の物でない物に手をかけたりすることを指す。そうしたことは子ども同士の「対人関係」においてよく起きそうなことだが、コメニウスは、それは子どもが大人の真似をするからであって、乳母自身や、子どもを扱っている者がそうした振る舞いを撒き散らすことがなければ現れない、と述べている。

⑦勤労精神に関わっては、コメニウスは、幼いうちから、何もしないのは許容せず、絶えず作業をするように誘い込むのがよいとしている。といっても大人と同じような実際の労働をさせるというのではなく、遊びの形で仕事に熱中させ、そのことをとおして勤労精神を学ぶのが大切だとしている。

⑧沈黙は、啞にするためではない。そうでなく、理性的な沈黙は、理性的な喋りを育てることにもなるからである。私たちの生涯と社交において話すことと沈黙することとはすべての基礎になる。したがってその根において両者を理性でつなげておかななくてはならない。幼児においても、早期から、沈黙を教えるべきなのである。教えるべき沈黙として、第一に、お祈りや勤行では静かに振る舞い、その時間には騒いだり、走りまわったり、お喋りや泣き叫びをしないようにさせること、第二に、言葉の熟慮をあげる。つまり、言い出すことでも、質問に対する答えでも、何をどのように発言すれば理性的かを斟酌することに馴れるということである。

⑨我慢は、さきあげた欲望の節制とも関連す

る。過度の甘やかしが排除されていれば、子どもには我慢が当たり前になる。やらないといったものを、泣き叫んだりして貰いたいと思ったり、怒り狂い、癩癪、仕返しで暴れ、殴る子もいる。しかしそれは、生まれつきの性格ではなく、むしろ下生えの毒麦だから、親はこのような悪い物をすぐ根元のところで防止しなければならない。こうした毒麦に気付くやいなや、それを引き抜いて本当の苗がますます良く伸長するようにするのがよい。必要以上に蜂蜜、砂糖、果実を味わいたいと思うのをみてとったら、その子よりも理性的になって、与えないようにする。その子を連れてその場を離れ、何か別のことに熱中させる。泣き叫んでも気にしてはいけない。そのままにしておけば泣かなくなる。こうすれば子どもは、自分の思いついたことを行うのではなく、大人の気に入ることをすべきだと理解するようになる、という。

⑩奉仕の心は、委託された仕事を自ら喜んで引き受ける心のことである。子どもにはもともとこのような心が備わっているので、父母は自分だけでなし遂げられることでも、それを子どもに委託すればよいのである。そのように自発的に年長者に奉仕することは、幼いうちから馴れておけば、後になって優れた飾りになるだろう、という。

⑪礼儀正しきは、親にも他人にも親しみを込めて、愛想よく、気にいられるように行動を取ること指す。親や他人との交わりの術を指す。親がそのように振る舞っていれば自然にその通りに真似するので特別な教示は必要ないのだが、そうならない場合もあるので放置しておかないでほしいとする。

⑫ていねいさは、⑩礼儀正しきさであげた親しみや愛想に理性を加えることを指す。犬や猫のような親しさ・愛想であってはならないのであって、慎み深さ・重厚さを伴わなければならない。こうして、慎み深さ・重厚さを伴った身体的な身振りを習得することが課題となる。つまり、相応しく座る、姿勢正しく歩く、まっすぐに立つ。なにかが必要なら乞い求め、それが与えられたら礼を言い、誰かに会ったら挨拶をするなどである。

コメニウス自身は上記の12の徳を羅列的に並べて叙述しているだけであって、何ら整理・分類をしていない。しかし、そこからコメニウスの乳幼

児の道徳性についての概括的な見解を読み取ろうとすれば、何らかの整理をし、構造化をする必要がある。それをとらえてコメニウスの考えがよく見えてくるからである。

実は、整理・構造化の手がかりは、同時期に執筆・出版された『教授学』（1632）における「徳の教授方法」（第23章）、および『大教授学』（1638）における「徳の教授方法」（第23章）に求めることができる。

コメニウスは『教授学』では内面的な主徳として、思慮深さ、節制、たくましさ（勇気）、正義をあげ、外面的な徳として、他人とのていねいな交際の習慣化された形態をあげている。<sup>91</sup> 内面的な主徳には、つぎのようなものが入っている。

- ・思慮深さ—事物間の正しい区別の認識（から生じる）
- ・節制—飲と食、就寝と起床、労働と気晴らしなどの分別
- ・たくましさ（勇気）—自分自身の制御（克己）、自分の欲望の制御、熱中、短気、立腹の制御、他人の意志に従う
- ・正義—人を傷つけない、人を辱めない、心配させない、偽りと策略を避けるなど

『大教授学』においてコメニウスは、なによりもまず植えつけなければならないのは、ふつう主徳と呼ばれる基本徳性だとし、思慮深さ、ほどのよさ（節制）、心身のたくましさ、正義の心をあげている。この主徳は、周知のように、プラトンが『国家』のなかであげた知恵、節制、勇気、正義に対応している。<sup>92</sup> このプラトンの四徳を受け継いで、コメニウスは主徳と呼んでいるようである。『大教授学』では、四つの主徳にもとづいて徳を説明し、「徳の教授方法」を述べているのだが、四つの主徳にはどんなものが入るかを『大教授学』の記述をもとにまとめてみると次のようになる。<sup>93</sup>

- ・思慮深さ—事物についての正しい価値判断
- ・ほどのよさ（節制）—飲食の摂取・就寝と起床における節制、労働と遊戯・会話と沈黙におけるけじめ
- ・たくましさ（勇気）—我慢（気儘、不平、立腹の制御、自分の意志より他人の意志を重んずる習慣）、品のよい大胆さ（交際）、

労働による忍耐力の形成

- ・正義心—対人関係における正義の行動のなかで形成されるもので、たとえば人を傷つけない、相手の持ち分を認める、偽り・欺きを避ける、進んで他人に奉仕する心

『教授学』と『大教授学』の記述を参考にして、先の12の徳を区分してみると次のようになる。

- ・ほどよさ（節制）—①節制、②身だしなみ、③沈黙
- ・たくましさ—④従順、⑦勤労精神、⑨我慢、⑩礼儀正しさ、⑫ていねいさ
- ・正義心—③気づかい、⑤正直、⑥正義、⑩奉仕の心

周知のように、アリストテレスは徳を知性的徳と倫理的徳とに区分し、思慮などの知性的徳はその発生と成長を大部分教示に負うのに対して、節制などの倫理的徳は習慣づけにもとづいて生ずるとした。<sup>94</sup> 上記の区分をみると、乳幼児のばあい、『大教授学』にみられたような思慮深さの徳が存在しない。思慮深さは知性にもとづいているが、乳幼児では知性の未成熟のために徳からはずしたものと思われる。コメニウスのあげた12の徳は、いずれも、アリストテレスのいうところの倫理的徳であって、習慣づけによって生ずるものである。

12の徳のうちで、「節制」に関する徳は、すべての作法・品性の基礎になるものである。そのうちで①中庸（節制）と②身だしなみ・身づくろいは、身辺自立に関わり、親の助けを借りながら自分の中に生活行動の基本を習慣的に確立していくものである。人間の最低限の生活行動である飲食、睡眠、着服に関わって、基本的な生活作法を習慣として形成することを説いている。このような基本的な生活作法の習慣化にともなって、人間として相應しい品性が生まれてくるのである。コメニウスにあっては、①中庸（節制）と②身だしなみ・身づくろいは徳（作法と品性）の基礎をなす部分だと位置づけられていると言ってよい。この延長線に③沈黙がある。

たくましさに関する徳は、他人（親）の助けを借りて基本的な生活リズム・習慣を確立する①中庸（節制）と②身だしなみ・身づくろいを基礎とし、④従順、⑨我慢にみられるように「節制」を土台にして形成される。ここでは、欲望におもむくま

まの衝動的行動に対して、自己節制に力点を置いてたくましい(勇氣ある)行動をとらえている。そしてそれを遊び・労働における徳(作法と品性)、他人との交際における徳(作法と品性)へと発展させている。乳幼児は遊び・労働、他人との交際によって自分の世界を広げ、自己を形成・確立していくのだが、ここでは遊び・労働・交際における徳(作法と品性)を取り上げて問題にしている。たくましさ(勇氣)の徳では、自己節制を土台としながら、諸活動への取り組み、対人的交わりにおけるたくましさという形で外へ向かっていくという傾向がみられる。

正義心に関する徳は、「対人関係」場面において正義の行動を取ることによって形成されるという特徴をもつ。『教授学』『大教授学』の叙述をみると、正義の行動といっても、まずは、対人関係において相手を傷つけない、辱めない、心配させないという形で相手への配慮の行動をとらせることから出発し、それを、偽りと策略をさけるといった正義の行動へと発展させていっている。『母親学校の指針』では、土台となる相手への配慮の行動についてはその基礎として③気づかいを置き、対人関係における相手への配慮の延長線に⑩奉仕の心を置いている。⑩奉仕の心は、仕事への奉仕という点で、たくましさに関する徳の⑦勤労精神に結びついていく。正義の行動としては、⑤正直(事実を話す、欺瞞・嘘をつかない)、⑥正義(他人の物に対する欲望の節制)を置いている。

以上、12の徳を主徳に区分して考察してきたのだが、その内容は中世的な伝統的徳と何ら変わりが無いのだろうか。直接に『母親学校の指針』について述べているわけではないが、東ドイツのコメニウス研究者R.アルトは「たとえ、求められた行動様式の中には一般に、中世においても既に要求されていたような諸徳に遭遇するとしても、ここでは社会生活の変化とか教会の無制約権威からの離反とか、民主的な大衆運動の諸傾向などを反映した新しい要素が滲透している」とし、「決して許さるべきでないといわれる行動様式の中に、例えば他人への蔑視とか軽蔑とかも考えられている」と指摘している。<sup>9)</sup> 形としては旧来の諸徳と変わらないようにみえても、その中に新しい内容を盛り込んでいる。たとえば、職業倫理と結びつ

けて「勤労精神」「正義」を論じているのはその一例である。<sup>9)</sup>

そうした新しい要素はとくに後期の著作のなかに明瞭に現れているのだが、前期の著作である『母親学校の指針』にもその萌芽がみられる。コメニウスにおける乳幼児の道徳性のとらえかたにおいてユニークな点の一つには、言語(言語活動)における道徳性に注目していることがある。⑤正直、⑧沈黙のいずれも、人間の舌に関わる重要なことである。コメニウスは人間形成にはたす言語の役割を重視し、喋ることの中にも品性があることに着目し、「言語(行為)」における道徳性を重視している。その言語(言語活動)における道徳性に関わって、コメニウスは、たとえば⑤正直において冗談を問題にし、「自分がなにかをしでかしたときは他人のせいになさいと、また、それを演じる術を知っているなら冗談や笑いの種を演じなさいと、子どもをそそのかす癖の人もいますが、それがどんな結果を招くか、私には分かりません。しかし、嘘を冗談だと考えることに馴れるとしたら、いま嘘をつくことに馴れることは、その子以外の誰にとって悪いことになるのでしょうか。」<sup>10)</sup>と述べている。ここでコメニウスは冗談でごまかす幼児自身に目を向けているが、同時に、いまは萌芽でしかないとしても、さきにアルトが指摘した「他人への蔑視とか軽蔑」につながる悪徳を問題にしているとも見られる。この点に、民主的な大衆運動の諸傾向などを反映した新しい要素をうかがえよう。

新しい要素の二つには、労働における道徳性に着目していることである。乳幼児にも労働の意欲があることに着目し、仕事を積極的に遂行させていき、勤労の作法と精神を養っていくことを大切にしている。この点はほかの教育思想家にはあまりみられない。コメニウスの道徳性の把握において、労働の経験、奉仕の経験が強調され、それらの経験をとおした勤労精神、奉仕の心の育成が強調されていることは彼の大きな特徴だといえる。井ノ口淳三のいうように、「人間が他と出会い、己れを知るのは、積極的な労働を介してであり、この他とのかかわりにおける自己の位置と責任を学ぶのが倫理の基本である」<sup>11)</sup>とすれば、労働における道徳性は職業倫理とつながった道徳性に発

展していくことになる。

『母親学校の指針』では、乳幼児の発達段階に合致した形で遊びの形での仕事への熱中、委託された仕事の遂行を取り上げ、上記の側面を展開している。このことはきわめて重要で、高く評価すべき点である。

#### 4 道徳性の教育と発達段階

##### (1) 道徳性の教育内容と発達段階

すでに多くの研究者が指摘しているように<sup>84</sup>、コメニウスは乳幼児を一括してとらえているのではない。彼のまなざしはあくまでも乳幼児の変化していく個性的様態に向けられている。そこから自己の論を修正したり、再構築していくという側面がある。そこに、乳幼児の発達に即した教育要求ということが浮かび上がってくる。

『母親学校の指針』では学齢期と同じような実践的知識（学芸）の名称があげられている。それは認識・行為・言語の三部門に区分けされて、さらに細かく認識には自然学・工学・天文学・地理学・年代学・歴史・家政学・政治学、行為には算術・幾何学・工作労働・弁証法・音楽、言語には文法・修辞学・詩があげられている。それらの名称をみただけで、何と高度な知識を要求していることか、と大抵の人は思い込む。だが皮はそうであっても中身の酒は全くちがっている。たとえば地理学で目標としてあげられているのは、自分が誕生し住んでいる場所がわかり、野原、丘、山、川などが何かを理解できることなのである。そこから、本格的な地理学を要求しているのではなく、乳幼児の発達段階に合致した地理認識を要求していることがわかる。

そればかりではない。どの年齢ではどの程度のことかという目安を示していることに注目したい。それは彼が乳幼児の発達の様態を細かく観察し、それにもとづいて教育内容を設定していることを証明しているからである。

たとえば地理学では、次のような記述になっている。

「お誕生前やそれ以降の子にとって、地理学の初歩は、自分の居場所、自分の揺籃、母の膝を識別するようになってくる場合でしょう。二、三歳までには、彼らの地理学は、自分の哺育されてい

る部屋などと共に、寝るときは、食事のときは、散歩にいきたいときは、どこへ向かっていくのか、光はどこで、暖かさはどこで探し求められるのか、と言うことを知ることでしょう。三歳までに、居間ばかりでなく、広間に、台所に、物置部屋に、分農場に、厩に、畑に、要するに、家の中や家の周りにいることを、すでに自覚しているようになれば、地理学の知識は豊かになりましょう。四歳までに、街路、市場、隣家、叔父、祖父、祖母、叔母のところ、等々はすでに行きつけの場所になっていることでしょう。五、六歳までには、その都市、村、野原、山、川、等々というものは何かを、すべて確認し、理解できるようになります。」<sup>85</sup>

コメニウスは、地理学での記述と同じような形で、実践的知識の領域ごとに年齢による学習課題を設定している。だから必ずしも一様ではない。一様でないということは、子どもの示す諸現象を鋭く観察していることを指すわけで、コメニウスの子どもを見る目が機械的ではなく、柔軟で暖かいことを意味している。

だが全科目を通してみると、大局的には、一歳と二歳の間、三歳と四歳の間の二箇所に大きな区切りがあるように感じられる。ついで小さな区切りが二歳と三歳の間、四歳と五歳の間でなされており、五歳と六歳はほぼ同じ発達段階としてとらえているようにみえる。<sup>86</sup> こうしてコメニウスは乳幼児の発達の節目をとらえているように感じられる。

以上は実践的知識（学芸）の領域についてのことだが、では道徳性の領域ではどうか。

徳の内容をみると、少年期とほぼ同じ徳を扱っていて、名称だけをみると乳幼児には高度に思えるところもあるのだが、方法的には、あくまでも身近な生活行動、大人や仲間との共同生活の中での生活行動に即して作法を習慣的に形成し、その中で品性を形成していくという筋道をとっているために<sup>87</sup>、その形成は困難ではない。たとえば「正義心」の徳では、子ども同士のモノの奪い合いという幼児期によくみられる身近な生活現象を取り上げて、それを問題にし、人のモノを取らないという生活行動の遵守をとおして「正義心」の徳を形成することになっている。ここでもコメニウスは実践的知識（学芸）の場合と同じく、子ども



の発達の個性的様態をみすえ、そこから生活行動上の適切な課題を取り出していく。ここには乳幼児の発達段階への配慮がうかがわれる。

年齢区分に関わっては、道徳性の領域では、実践的知識(学芸)の領域ほど年齢区分が明確ではない。身だしなみ・身づくろいの箇所、その初歩は一歳前にすぐ掘えられ、二歳、三歳までやそれ以降では、飽食、舌鼓、舌嘗めずり、等々をしないでキチンと食べ、汚したり、つばを飛ばしたり、相応しくないガブ飲みをしたりしないで飲むことを学んでほしいとしている。我慢の箇所、二、三歳までにすぐ、ちょっとした激情を現し始める子もいるとし、二歳になる前の子どもではこういう誘導には幼すぎるといふことはないとしている。年齢区分の記述はこれだけである。この点からすれば、コメニウスの道徳性の記述は年齢区分によるシーケンスではなく、スコープによる叙述展開だといえるかもしれない。<sup>94</sup>

たしかにコメニウスの道徳性の叙述は、実践的知識の領域に比べて、年齢区分に大きな粗さがあり、年齢区分によるシーケンスを展開しているとは言い難い。これには、道徳性の発達は実践的知識の習得ほど単純ではないという事情があったのかもしれない。だが粗さがあるからといって、道徳性の教育において発達段階への配慮が弱いとは言いきれない。実践的知識ではみられなかったことだが、道徳性のスコープをみると徳目の並べ方に順序性のようなものも感じられる。基層的なものとして①中庸(節制)、②身だしなみ・身づくろいをあげ、それらは一歳前に形成されるととらえ、その上にたつて六歳までにその他の徳が育成されるととらえていると見ることができよう。コメニウスの道徳性の叙述は基層的なものから叙述をはじめていて、基層的なものの上に立って「節制」-「たくましさ」-「正義心」における道徳性を叙述しているようにも見える。もしこの見方が妥当性をもつのであれば、道徳性にあっても発達段階への配慮を全く放棄しているとみるわけにはいかない。

## (2) 道徳性の教育方法と発達段階

コメニウスは『母親学校の指針』の第9章で、乳幼児における道徳性の教育は、ふつう考えられ

るほど困難ではないとする。若い木の方が成木よりも、これこれしかじかのように育つように曲げたり、備えをしたりするのは、はるかに容易である。それと同じく、正しい手段さえ用いれば、幼い者をこの乳幼児期に道徳性へと誘導するのは、後になってそうするよりもはるかに容易にできると述べている。この時期の道徳性の教育方法として、コメニウスは、①絶えざる実例(手本)、②適時の、分別のある教示、③ほどよい訓練、の三つをあげている。<sup>95</sup>

①絶えざる実例(手本)について。このことの必要性について、神は子どもに「狼の性格」、すなわち模倣の願望=好奇心を与えたのであり、幼い人間は指示や報告を受けなくても、他人がするのを見て取ったり聞いたりさえすれば同じことを同じ仕方をするのに馴れている、と述べている。このことは不変の経験によって確かめられているとする。ここには、乳幼児へのこまやかな観察をもとにしての、コメニウスの、幼児の自発性への深い信頼を見ることができる。親が先に述べた品性に反するような行動をしなければ、後にあげる教示も、懲戒もそれほど必要ではないのだとする。それだけに、模倣される大人の責任も大きい。

②適時の、分別のある教示について。しかし私たち成人が頻繁にかつ極端に基準から外れていることもないわけではない。したがって、その点を考慮すれば、実例(手本)と並んで、適時の、分別のある教示が必要になる。その子が実例(手本)に引きつけられなかったり、他の実例(手本)にしたがって何かをしてみたいと思っても、術(方法)を知らないでいるということを見て取ったときに、簡潔な教示をするのである。乳幼児期は、もっと詳細に教示したり、何らかの説教をしたいと思っても、まだその時期ではない。したがってそうしても何もし逃げられないであろう、と述べている。

③ほどよい訓練について。これは、子どもが実例や教示に注意深く引きつけられるようにするために採られる方法である。これには二段階がある。最初の段階として、子どもが何か不適切なことをしたときの禁止として、ことばによる理性的な覚醒(ときには処罰・辱め)がある。これによって改心の様子が見て取られれば、すぐにでも、少し

後にでも、再び誉めるのが良いだろうとしている。分別のある誉め方と誉め方によって、とても多くのことがなし遂げられると述べている。これが通用しない場合に、第二段階の訓練として、小さな鞭や手での殴打がある。それをする目的は、子どもに忘れないように辱めを被らせ、今後さらに注意深くなるようにすることにあるという。子どもには理解できないのだとし、走り回り、歩き回り、泣き叫び、不平を言い、怒り、せがむままにさせておく親に対して、「狂気が幼少期から人間の心に縛り付けられているにしても、訓練の鞭がこれを断ち切る」「鞭と叱責とは知恵を与えるが、放縦な子どもは、そのやさしい親に恥と出会わせる」との聖書の「箴言」を引用して、悪癖の矯正における鞭の意義を鋭く。ここでコメニウスは威嚇と鞭の教育の必要性を述べてはいるが、それは緊急的な応急措置なのであり、あくまでも、それを回避し、禁止や理性的な罰に留めるための方策に主眼がある。コメニウスとしては①絶えざる実例(手本)、②適時の、分別のある教示に大きな期待を寄せていることを見逃してはならないであろう。

以上のコメニウスにおける乳幼児の道徳性の教育方法を概観してみて、次の特徴があることに気づく。

まず第一に、乳幼児にはもともと模倣の願望＝好奇心があり、いわば自然的本性にそった教育がめざされていることである。コメニウスは、大人があらのままの姿でまっとうな道徳性を示せば、それが道徳性の教育になるとする。ペーコンの方法を取り入れて、自然に従った消極的な教育方法を探っている。このことは後のルソーにも通じる点であり、注目に値する。<sup>(21)</sup>

第二に、乳幼児に本来内在する自然的本性である模倣の願望＝好奇心を方向づけるものとして、教示と訓練があるとしていることである。したがって教示と訓練が用いられるにしても、万能的ではない。乳幼児の内面性と絡ませて、つねに適時性、分別性、ほどよさが考慮されなければならないということになる。

第三に、上記とも関連するが、道徳性の教育方法を採用するにあたって、乳幼児の発達の特性が考慮されていることである、人間の内では乳幼児には模倣の願望がとくに強いことを見て取り、実例

(手本)での教育を最優先させていること、そして乳幼児には詳細な教示や説教は不相当であって、簡潔な指示こそが望ましいとしている<sup>(22)</sup>ことの中に、乳幼児という発達段階への配慮を読み取ることができる。

## 5 道徳性の教育と子ども同士の相互交流

ところでコメニウスは『母親学校の指針』において子ども同士の相互交流を意義あるものとして位置づけている。幼児教育史上、子ども同士の相互交流を重視したのはコメニウスが最初であり、とくに注目に値する。

どこでその記述がみられるかといえば、幼児の健康・理解力・言語能力のところである。まず、第5章「幼い者の健康にいかん気をつけ、育むべきか」の章末で、朗らかな心だけが人間の生命だから、幼児を朗らかにさせるために力を尽くすべきだと説いたところで、「2、3、4歳までや、それ以降までは、彼らに対して、あるいは彼ら自身互いに冗談を言うこと、遊び、走り回り、追い駆けっこ、音楽を聴くこと、何か快いものに目を止めること、等々です」(傍線は引用者)と述べている。<sup>(23)</sup>さらに第6章「幼子の理解力はどんな仕方でも育むべきか」の章で、認識に関する科目を順次あげて幼児子の理解力の合理的な教育について説明した後で、仲間の教育的力について次のように述べている。

「たとえ、乳母や親が子どもを少なからずうまく育てられるとしても、このすべてにおいて、彼らと同年齢の子どもたち、すなわち、喋ってくれる者であれ、一緒に遊ぶ者であれ、仲間の子の方がもっとうまくできる、ということを書いておきましょう。なぜなら、子どもたちのあいだでは年齢が似ていれば、性格や考え方も似たものが生じるからです。一人の子の発明は他の子にとっては高度過ぎる、ということはありません。彼らの間には、支配、矯正、恐怖、怯えはどれも無く、平等、情愛、解放感があり、遂行されることすべてに対して、問いただすのも答えるのも自由であり、これらはみな、私たち年長者が、子どもを扱いたいと思うさいに、私たちには欠けており、その欠如が障害になっているものです。ですから、子どもは子どもによる方が、他のおとなによるよ

りも、知能も鋭敏になり、研ぎすまされる、ということを決して疑ってはなりません。こういうわけで、子どもは、子ども同士で集まり、街路で一緒に遊んだり走り回ったりすることは、毎日ではあっても、させておくだけでなく、させるように工夫するべきことでもあります。」<sup>(24)</sup>

ここに子ども同士の相互交流による教育作用に大きな注目と期待が寄せられている。このあたりの、子ども同士の人間関係における平等性、情愛性、解放性、行動の問い直しにおける自由性へのコメニウスの着眼は驚嘆に値する。

さらに第9章「幼子の言語能力は、どのように育べきか」で、「修辭学」の項においてほんの僅かであるが、子ども同士の関わりに言及している。それは、「ようやく単語の本来の意味づけを理解することを学んでいる間は、喩え(つまり単語や、その意味づけを次々と同じようなものと交換すること)を、子どもは、それほど把握はできません。しかし、五、六歳になるまでは、同年齢の子や、乳母や、その他の、家の人から、それを何か聴けば、そのことに馴れ親しむこともできましよう。」(傍線は引用者)<sup>(25)</sup>という箇所である。

しかし、子ども同士の相互交流による教育的作用について述べられているのは、上記の3箇所だけである。道徳性の教育に関わる第9章「幼い者の作法と品性は、どのように育むべきか」では、子ども同士の相互交流やその教育的効用について全く述べられていない。では、コメニウスは子ども同士の相互交流の効用を健康と知能と言語能力の向上の側面に限ったのだろうか。たしかに『母親学校の指針』の形式的な構成からは、そのようにも感じられる。しかし書かれている記述をこまかく検討すると、そうではないようにも思われる。

第6章「幼子の理解力はどんな仕方で育むべきか」の章で政治学について述べられているが、この政治学での記述は道徳性と大いに関係している。そこで言われている政治学は、都市の中で誰とかいう人が市長、議員、助役になり、市民がときどきその地域に参会する、といったことを理解することを内容とする。しかし幼児にはそのような事柄は把握できないし、把握させる必要はないとコメニウスは述べ、その基礎として、社会上の人間関係を学ばせることを説いている。徳(作法と品

性)も人間関係の中で形成される。こうして、ここに徳(作法と品性)との接点があるということになる。

幼児における政治学の認識に関して、コメニウスが指摘していることは、まず第一に、自分が仕えるべき者、注意を払う者、気を付けてやるべき者は誰かを納得させることであり、誰かが呼んだときは、振り向き、したいと思うことを中止し、言うことを聞くのが、自分の義務であるということ<sup>(26)</sup>を納得させることである。第二に、それと関わって、冗談の場合でさえ、尋ねられたことにキチンと返答することであり、いつ、なにかを冗談で考えているのか、いつ本気に考えているのかを理解させ、それらに応じて、いつ冗談でやり返すべきか、いつ指示されたことを冗談ぬきで行うべきかを、わかるように教えることである。つまり、他者への注目と気配り、会話でのキチンとした対応(とくに冗談と本気の区別、冗談への対応)を幼児における政治学の課題としている。こうしたことは人間関係の中でこそ学ばれるのであって、そこに子ども同士の相互交流が生かされる可能性がある。子ども同士で集まり、街路で一緒に遊んだり走り回ったりするなかで、他者への注目と気配り、会話でのキチンとした対応(とくに冗談と本気の区別、冗談への対応)の基礎的部分が自然のうちに学び取られる。こうして、子ども同士の相互交流は道徳性の教育にとっても有益である、という帰結が論理的にみちびきだされる。もっともコメニウスは、この帰結についてあまり自覚していなかったように思われる。「同年令の子」「子ども同士」といった記述が見られないからである。コメニウス自身の言明の有無を重視するならば、道徳教育における子ども同士の相互交流は、可能性として考えられるにとどまるかもしれない。

ところで、コメニウスが幼児の政治学の課題として述べている上記二点の内容だけが道徳性の教育内容なのではない。コメニウスがあげている道徳性の教育内容は、それ以外のものをたくさん含んでいる。このように考えると、コメニウスが道徳性の教育において子ども同士の相互交流の効用を認めたととしても、道徳性の教育の一部分に限りて有益だとしているように思われる。この点に注意しておく必要がある。またこのことと関連し

て、全体のトーンとしては、すでにみたように、おとなとの直接的関係のなかで道徳性の教育を推進していこうとする傾向が強く現れているといわざるを得ない。道徳性の教育にあって、子ども同士の相互交流はどちらかといえば従属的位置にあることに注意しておく必要がある。

このことと関わって、コメニウスにあっては、乳幼児教育を家庭教育として構想しているためでもあろうか、子ども同士の相互交流は積極的に指導すべきものとしてとらえられていない。組織的に発展させていくものとしては考えられていない。むしろ自然に任せておくのがよいとされている。子ども同士の相互交流は、街路で一緒に遊んだり走り回ったりすることによりかなり限定されていて、しかもそこでの教師の助成的介入には消極的である。相互交流の機会を設けることと、悪い仲間に入り込ませないこと、悪い仲間であればそこに割って入り自分の子を引き離すことに言及しているだけである。<sup>(26)</sup> 助成的介入を教育の本質だとすれば<sup>(27)</sup>、『母親学校の指針』においてコメニウスは乳幼児段階では子ども同士の相互交流の効用を原理的に認めてはいるものの、それを集団教育ないし集団指導法として明確に位置づけているとは言い難い、ととらえるのが妥当なように思われる。<sup>(28)</sup> そういう点では、『母親学校の指針』にみる限り、コメニウスにおける子ども同士の相互交流の効用への着目（－それ自体はきわめて画期的なことなのだが）を、現代にみられるような幼児の集団教育ないし集団指導法の先駆者としてみることに、一定の留保を置く必要がある。

#### 注

- (1) 篠原助市によれば、「家庭における母の子女に及ぼす教育作用、夫れの重大な意義は彼によって始めて認められた。この点で彼はベスタロッチ及びフレーベルの先駆である。」とされる。篠原助市『欧州教育思想史（上）』玉川大学出版部、1972年、150ページ。
- (2) コメニウス（藤田輝夫訳）『母親学校の指針』玉川大学出版部、1986年、205ページ。
- (3) 同上、13～21ページ。
- (4) 同上、25ページ。
- (5) 同上、32ページ。
- (6) 同上、83～93ページ。
- (7) J.A.Komensky, *Böhmische Didaktik*, ins Deutsche übersetzt von K.Schaller, 1970, S. 168～169.
- (8) プラトン（藤沢汎夫訳）『国家（上）』岩波文庫、1979年。
- (9) コメニウス（鈴木秀勇訳）『大教授学（2）』明治図書、1962年、41～44ページ。
- (10) アリストテレス（高田三郎訳）『ニコマコス倫理学（上）』岩波文庫、1971年、55ページ。『ニコマコス倫理学』は、哲学史上で倫理学に関する最初の体系的著作だとされている。
- (11) R.アルト（江藤恭二訳）『コメニウスの教育学』明治図書、1959年、103～104ページ。
- (12) 藤原幸男「コメニウスの道徳教育論」『琉球大学法文学部紀要（社会学編）』第31号、1989年3月。
- (13) コメニウス（藤田輝夫訳）『母親学校の指針』、87ページ。
- (14) 井ノ口淳三「コメニウスにおける幼児教育論の展開とその背景」『京都大学教育学部紀要』第22巻、1976年3月、31ページ。
- (15) 井ノ口淳三「『母親学校の指針』における年齢区分に関する考察」『鳥根女子短期大学紀要』19号、1981年、藤田輝夫「コメニウスの幼児教育思想と『母親学校の指針』」『母親学校の指針』玉川大学出版部、1986年、および太田光一「発達観と幼児教育の可能性」『保育幼児教育体系9、保育の思想』労働旬報社、1987年を参照。
- (16) コメニウス（藤田輝夫訳）『母親学校の指針』、57ページ。
- (17) 井ノ口淳三「『母親学校の指針』における年齢区分に関する考察」、58～59ページ。
- (18) 梅根悟は、コメニウスの道徳教育論にあっては、徳は説教によってではなく、行動そのものの実践を通じて学び取られるべきものであることを強調している点にコメニウスの進歩性があったというべきであろう、としている。梅根悟「市民革命期直前の道徳教育思想」『世界教育史大系38、道徳教育史』講談社、1976年、64～65ページ。
- (19) 藤田輝夫、前掲論文、143ページ。

(20) コメニウス（藤田輝夫訳）『母親学校の指針』、79～83ページ。ただし藤田輝夫訳では「懲戒」としてあるところを「訓練」に変えた。

(21) 鈴木秀勇「コメニウスの『教育思想』」『教育』150号、1962年、107～109ページ。および、鈴木秀勇「コメンスキーとルソー」『一橋論叢』64巻6号、1970年を参照。

(22) もっともコメニウスは後に、晩年の著作『汎教育』（1657年以降執筆）における「道徳と敬虔の学級」でたとえ話（寓話）のような形での詳細な教示を提唱している。「教示はオープンに、明るく、明瞭なことばによって行われる。たとえ話によって強調を表現する。たとえば従順さは、若い木と年取った木のたとえ話で説明される。」と述べている（Johann Amos Comenius, Pampaedia, herausgegeben von Dmitrij Tschizewskij, 1960, S.269.）。「道徳と敬虔の学級」が「言葉と知覚の学級」の後に位置づけられ、しかも「道徳と敬虔の学級」のあとに「最初の共同学校の学級あるいは最初の教授の学級」（4～6歳）が位置していることを考慮に入れてみると、この段階の道徳性の教育はある程度高い年齢の幼児を、おそらく3～4歳直前の幼児を想定しているように思われる。ここでは、後続の共同学校との接続を意識し、知性との結合を視野に入れて叙述をしているように思われる。知性との結合を視野に入れた道徳性の教育は、想像力を必要とするために、ある程度高い年齢の幼児でないと困難である。このように理解すれば、ここでの「たとえ話」による詳細な例示には納得が行くし、そこから、コメニウスが乳幼児の発達段階を無視しているのではないことが読み取れる。

とはいえコメニウスは、『母親学校の指針』で実践的知識に関して「政治学」の項で「理性的に構成された喩え話の中には、通常では何か道徳上の教えが込められている」と述べ、幼児に聞かせてやることができるとしているのであって、『汎教育』ではじめて出現するのではない。『汎教育』ではその論述を「道徳と敬虔の学級」のなかに含む込み、一層の体系化をはかったと見ることもできよう。

(23) コメニウス（藤田輝夫訳）『母親学校の指針』、

53ページ。

(24) 同上、62ページ。

(25) 同上、74～75ページ。

(26) 同上、62ページ。

(27) 中内敏夫『教育学第一歩』岩波書店、1988年。

(28) 家庭教育としての母親学校では、子ども同士の相互交流には教育＝助成的介入としての位置づけを学校ほど与えていない。幼児教育が施設教育として位置づけられたときにはじめて、子ども同士の相互交流が集団教育ないし集団指導法として浮上してくる。その後コメニウスは晩年の著作『汎教育』において施設教育に関心を移行していくが、藤田輝夫によれば、その移行には教授法における「愉快性」原理の明確化、その具体的現れである遊びの強調、児童期の学校との接続から生じる体系性・系統性が大きな原因になっているとされる。これについては、藤田輝夫「家庭教育から施設教育への集団指導法の変遷—コメンスキーの幼児教育論—」『秋田大学教育学部研究紀要（教育科学）』第38集、1988年2月を参照。

本研究は、昭和62年度文部省科学研究費による研究（総合研究A「乳幼児における道徳性の発達に関する総合的研究」（研究代表者・藤井敏彦））の成果の一部である。